

18-19 世紀の会津・南山御蔵入領における天候・作況・農業・人口

Weather, crop, farming, and demography in the Oku-Aizu region,
18-19th century

川口 洋(帝塚山大学)

Hiroshi KAWAGUCHI (Tezukayama University)

kawag@tezukayama-u.ac.jp

北関東以北では、18 世紀初頭を頂点として人口が減少を続け、とくに宝暦期、天明期、天保期の凶作のため、死者・欠落者が多数に上った。宝暦・天明・天保飢饉の具体像を復原するには、人口変動の復原とともに、民衆の生活を詳細に記録した史料の発見に努め、異常天候、作況、農業、商品流通、食物消費、さらには死因に接近を図る必要がある。

1. 主要史料

陸奥国会津郡高野組金井沢村名主を世襲した室井家は、稲の作況を記録した「作毛位付帳」、毎日の天気や農作業を記録した「農業萬日記」、前年の宗門改め以降の人口動態を記録した「人数増減差引之覚」をはじめとする貴重な史料を作成・保存してきた。

高野組における死亡者を供養した A 寺と B 寺の寺院「過去帳」、高野組黒沢新田村に住む 18 世紀後半の豪商、細井善四郎端阿が記した「細井日記」、田島組田島村に住む猪俣忠春と子の忠備が書き継いだ「忠春日記」などを室井家文書と合わせて検討すると、金井沢村は 18 世紀中期から 20 世紀初頭に至る 150 年間の天気、稲の作況、農作業、死亡人口、および異常気象の実態や米価を含む穀物価格などを追跡できる日本でも稀有な村である。

2. 異常気象

「天明三年 農業萬日記」(室井家文書, 4250) によれば、1783 年の金井沢村で降雨が記録されている日数は、6 月に 10 日(不記載 6 月 20 日, 27-30)、7 月に 4 日(不記載 7 月 1-7 日, 17 日)、8 月に 18 日、9 月に 10 日である。7 月 16 日・28 日・30 日、8 月 8 日・30 日・31 日、9 月 1 日・22 日、および 10 月 4 日に「サムシ」と記されている。

会津藩士・田村三省が書き残した「孫謀録」には、「六月十五日、小雨降東風日々吹て冷気を催す。…(略)…十六日、十七日、東風吹」と、7 月 14 日から 16 日に会津盆地で寒冷な東風が吹いたことが記録されている。東風は、オホーツク海高気圧から本州北部太平洋側に吹き出す寒冷な北東気流(ヤマセ)とみられる。「天明三年凶作」(室井家文書, 3248) には、「六月十日頃、別而不氣候。田嶋御祭り之節杯、裕或者わた入の上へかたひら杯着候テ参詣いたし候躰ニ而、以之外さむし」とある。7 月 14 日に祇園祭で賑わう田島村周辺の百姓は、冬着である裕や綿入れの上に帷子を重ね着して田出宇賀神社に参詣した。1784 年 7 月 14 日から 16 日まで、会津盆地と奥会津では、寒冷湿潤な東風の吹走にともなう異常低温と降雨が観察されていた。

奥会津では、1783 年 6 月中旬の梅雨入りから 9 月中旬の秋霖明けまで断続的に続いた長雨と浅間山の噴火にともなう 7 月 27 日から 8 月 4 日の降灰が重複して、異常低温と日照不足に見舞われた。6 月中旬の田植えからおよそ 1 カ月を経た 7 月中旬から異常低温が記録されているため、1783 年は、稲の分けつ期に生育が遅れ減収となる遅延型冷害と生殖成長期に低温のため不稔となる障害型冷害が重複した複合型冷害に分類できる。

3. 作況

「作毛位付帳」には、「天明三卯年 田方青作ニ而、當時歩刈可仕躰ニ無御座候」という記述とともに、粟・稗・蕎麦・菜大根・麻が下、小豆・芋・煙草が中、大豆が上と判定されている。「忠春日記」も、「粟、稗、そば等も実入りなくして、所により九月二日朝には、霜ふり申候。」と証言している。1783年は、例年歩刈を行う秋の彼岸過ぎとなっても、歩刈ができる状態ではなかった。稲ばかりか、粟、稗、蕎麦も登熟せず、1783年9月27日に初霜が降りた標高700mを超える高所では、収穫直前の粟、稗、蕎麦まで不作となった。

彼岸前後に行われていた例年より1カ月以上遅れて、若松から派遣された役人の下で、雪のなかで1783年11月6日に行われた歩刈の結果は、上田、稲草：ほそば、稲株：127株、粃：3合5夕、重量：32匁、下田、稲草：ほそば、稲株：118株、粃：2合5夕、重量：20匁と記録されている（「天明三年 御検見御歩刈書上帳 卯十月十二日 会津郡高野組金井沢村」(室井家文書、3251)）。歩刈の結果、未曾有の不作が確定した。

1783年11月に上田1坪から収穫された粃の重量と容積は、「作毛位付帳」に記録されている118年間で最低となった。粃の重量は、天保四年(1833)の150匁、天保九年(1839)の260匁に遠く及ばず、1764年から1799年に至る36年間の平均重量482匁の1割にも満たない。粃の容積も、天保四年の6合5夕、天保九年の9合5夕、天保六年の1升到り及ばず、1759年から1799年に至る41年間の平均収量1升7合7夕の2割程度である。

4. 死亡数

会津郡高野組に位置するA寺とB寺の寺院「過去帳」に供養されている死亡者は、1760年から1799年に至る40年間で年間平均31.6人、死亡性比は119.9である。年間死亡数が1760年から1799年に至る40年間の平均死亡数の2倍を超えたのは、1784年の92人、1768年と1780年の64人であり、1776年の50人がこの3年に次いで死亡数が多い。

1768年、1776年、1780年は、1坪から収穫された粃の重量が450匁、容積が1升7合を超え、平年を上回る作況であった。この3年は稲の作況と無関係な死亡危機とみられる。死亡性比は1768年に120.7、1776年に138.1、1780年に106.5であり、40年間の平均死亡性比119.9に比較的近い。童子・童男・童女といった戒名の位号を持つ年少死亡者の年間死亡数に占める構成比は、1768年に39.1%、1776年に30.0%、1780年に51.6%であり、いずれも40年間の年少死亡者の構成比19.4%を大幅に上回っている。年少死亡者の性比は、1768年が127.3、1776年が114.2、1780年が88.9であり、40年間の年少死亡性比161.4を大幅に下回る。稲の作況と連動しない死亡危機年の死亡性比は比較的均衡しており、年少死亡者の構成比が高く、年少死亡者の性比も均衡している。そのため、1768年、1776年、1780年に、年少人口に犠牲者の多い感染症が流行した可能性がある。

一方、天明六年(1786)には、1坪から収穫した粃の重量は300匁、容積は1升3合であり、1759年から1799年に至る期間で天明三年に次ぐ凶作となった。蕎麦、粟、稗の作況も下と判定されている。しかし、1786年と1787年の死亡数は、いずれも27人であり、40年間の平均年間死亡数31.6人を下回った。

18世紀中期から20世紀初頭に至る期間で、1坪から収穫される粃の収量が最低を記録した1783年の死亡数は39人、死亡性比は171.4、翌1784年の死亡数は92人、死亡性比は152.8となった。18-19世紀の200年間にA寺とB寺の寺院「過去帳」に供養されている年間死亡数が、1784年に最多となり、18-19世紀最大の死亡危機を迎えた。